

成形圖說

農事部

四

特 別
二 一
2442
4



三 1
2442
4

小野岡
氏藏書

成形圖說卷之四
目録

鷹 ^{ソフ} 桶 ^ト	田 ^タ 廬 ^{フセ}	於 ^カ 陰 ^{レキ}	耕 ^{クワ} 耘 ^リ	浸 ^タ 種 ^{カシ}	秧 ^ナ 田 ^シ
附 田 ^タ 儼 ^ニ	附 肥 ^{ヤシ} 養 ^{ナヒ}	附 初 ^{ハジメ} 秧 ^{ナヒ}			

成形圖說卷之四

昭和十八年
一月二十七日
購求

成形圖說卷之四

農事部 秧田類

苗代ナシロ 萬葉集 ○ 俗云ふへちろ田と代といふ

苗床ナシロ 床トコの畧也 母田ハハ 奥羽ミみて苗代田ナシロと稱せ 早ハヤ秧ヤシと稱て

秧田ナシロ 天工開物 ○ 正韻秧ヤシ音央禾ナシロ苗ナシロ正字通 苗ナシロ初生尚釋ハハ分科ハハ植ナシロ之ナシロ非ナシロ秧ナシロ即栽ナシロ禾ナシロ也

蕃名ナシログルーイセル

苗代ナシロハ一區ヒトセキの内ナシロあり尤トコロ土宜ナシロ成相ミタて治ナシロふナシロ最審イトモリニ

度ハカラふナシロ一ナシロまナシロびナシロ二番ナシロ打起ナシロの時ナシロ堅塊カタケリなきやうナシロにナシロ把ヨミコシラ勞ナシロへ

一ナシロおナシロおナシロとナシロたナシロ苜蓿アヤマ或ナシロハナシロ綠葉ナシロ青草ナシロ類ナシロのナシロ莖ナシロをナシロ二ナシロ把ナシロにナシロ種ナシロ蒔ナシロつナシロとナシロ其ナシロ上ナシロにナシロ肥ナシロ糞ナシロとナシロ澆ナシロてナシロはナシロちナシロのナシロよナシロありナシロ○凡ナシロ苗代ナシロニナシロ種ナシロ蒔ナシロ

ろんとしてハ預水と或ハ閉水ハ縦つて既ニ前附ての
 後と三日間ハ又水と閉縦おとけり閉バ苗葉整はさ
 縦ハ莖立長ヤゆるり縦ハ多と放去て苗と曬をり凡
 苗代ノ牙秧と撒おと一畝一升の積めて一畝の苗ハ
 三段むかりよ栽るるべし上田は七升此苗と一段は
 我下田ハ八升許るるべし天工開物凡秧田一畝いつり
所生秧供栽廿五畝
 つも梨花開る次と苗代時といつづも地通よもるべし
 貫之集よりしが本の出乃撮れ花とえてとら方人を程
 ハほきりる武蔵風土記曰荏原郡櫻田
者櫻開之時採苗故有此名夫苗代ハ當年農
 耕の初登ふして秋成乃登行と朝ふれば特よ吉日と程

いて二月土用の初午戌以て稲種を播せり二月の中
午日あり
 八日と用て此より前正月望日田家舉族潔齋し米と
 とふに必新しき白茅と採稻の葉とほろび柳の枝して
 玉籤と仰り玉籤古教に源り又五十籤とも云後徳大
寺教に苗代の水にあり五十竿としていそぶ
 や田子乃も写ハなくとも籤の頭は正月此若餅に揉揉
西州もても玉箸あどい
 葉より裏と實の上を挿と稲裏と稔の既も苗代に種蒔
 て此稲裏と官幣と水は挿て葉と盛田神を登まつ
 是取留手草と施す也又標繩と此鷹備と設く是農夫
 敬て木の炭あると塗の浅也若好忠おのみあれ川賀
 茂の御田代いさう忽て今も氣の神と行らん日次紀
曰農夫



蕃名パアジイウエーケン

種稲子と水と浸はる共水と種井と云俊頼集秋か

早しひろのおし祓とおいいで春を種井と云

かひは備中の邑名子稲井あり金葉集苗代の名よ

と云名種かしの法ハ凡仲春土用中但早晚ハ地稲子と

依子裏之渠川又ハ井の中子浸ふと約一七日許地道よ

よりては八九日より十日十一二日浸置とあり又夏の

土用五十日前子種稲子かして田子下は云はるべし

くて稲子の甲少垢うらと牙秧と云是と苗代と撒ふ

毛夜志延喜式子存里又冥前子と云とのハ甲少垢て白

散て地におちつり之と俗子帆而其牙秧と苗代と撒

ハ整ぬおとや詩と却行手奮揮ふと仰るハ跡云ざり

ハ撒るると漢ふて布秧布種と云ハ牙秧と秧田

ハ撒布おと云續貫行曰諸ハ種板彼岸の中より日數

種まきたり三十日種浸ハ八十八夜五六日苗代

て二三日おとて色淡ハ日敷十四日又ハ洗板ふと云

ハ夜過て荷うて荷をありと也且植田をじりハ五

月中迄極うら近年中ころより漸植はとめ夏生迄

もわたり早女の袖つまいまぐ乾りぬ子お面の麦ハ

萌るやうは浅ぬまバ万さ墨て此こかと初と云ハ

肉子や一番草の頂来るは畑物の介錯おられハ

らは好草はゆらんとすれバ役うあう是はのり

と志は海は程はつは秋はまはりて早稲の刈はり

中は子は追はり所はあり云は畿内はてハ五月節はり植はり

て夏至まのあのつのあ

佐苗万葉集○早苗とも書りりさふへハ稻苗も限らる

ふ和と省りると

初秧宋耕 早秧天工

著名スフロイツスル

新秧ハナのま針むのり細く短くと筒苗ツツナと云漢ハ一と秧ハ鍼ハ

縁ハ鍼ハかどりつり三四寸許と長立てみのく一と初苗

玉苗かど綿ていつり凡ハ早苗ハ苗代ハ撒つけてより五

十五日と拔栽ヒキの期と以之と過てハ節とちぬる故ハ四

十五日ハいちや拔登一ハ三十五日めと期ハ故ハ

早苗採るハ苗代より拔て因ハ移植ウエの時ハ漢ハ拔秧

とんとり急き採と雨の森宵と伝を双子ハいりぐハ

どろろ挿秧の詩ハ抛擲不停手とらら合り苗うらハ

と志づのと志づのめとらハ新猿樂記ハ五月ハ男女とハ

ありあるハ小苗少女かどりといつバともハ婦女のハ

けわがたりけてとらハ秧漢あてと挿秧婦かどりき

信濃まてハ田と殖る男ともハつつ續貫行或老農曰

田う多ハ早少女と摺まぬハ那ととハ代とかハ

侍まて早少女とはやとまげまて植るとハ子少女ハ

任ととハ苗の柔ふるとのと何ともハ男の取りのり

ひてハ苗つこ植るハ苗腰を折て田又じありい
づきにも男のうゑは付田ハ出来ころ一お法のどく
田植ハ早少女の袖とらぬ蓋の端とあつてつきて
田歌とつて田の神といふもやして植る時ハ穂に
かど生して出来ころ一紐さう苗成長してハおもぬお
つとよいふ苗りて穂と持時と孕と云實入とハ生と
ついで葉の梅いろとあつてうむふといつてハこれ稲子
と産の深ととやそいふ一さう稲とつてふふとハと
これの不便とて嫁姑おまどつりて植るとさハ田作の
出来ころと自然ありといつり○小苗うゑむとて田

と作るをオキカク下起とらふ小苗の延過るとさう一さう亦おい
ゆくふどいふ節フシのハ節序レホの後オシレに稲莖イナガラのころ延る也
畝輔ウツおよいろ涼く門田乃ゆふ一ぬみるり急ぎさうの
とさうたぬ宵ヨ又骨根ホネぬかをぬ御田ミタ登ノボるあハ
さ清きた浅アサよりりいりぐや子苗おひるすすれ○農
書ハ苗代ヒトセあうけ引の事種と荷て十日ヒトセほどしてささか
一尺ヒトセ雨の時水と落一二月ヒトセぐり干其ホレ後ホレも又見合ミ合ア于スお
ともある也一但苗代と熇ホレおふ一雨アメふさうもあつたあ
とさうけて根と畝のきりぬやうもさう一○苗代ヒトセの
狭サ長ナガ三可サむりも及ぶ頃ヒトセをいそとらり一區ヒトセつて二分ウエ

栽なり唐岑參詩の水種新挿秧といひ其栽は苗の根
と魚汁糞汁は漚しつゝ土宜よる或ハ二三本或ハ四
五本一科として科毎の間と二尺ぐりり疏て條々
が碁枰のやうといひふも丁寧は間配をなす漢書朱虛
侯耕田歌おもまむるは整直ようする厚きよといひ
甲○凡水田の縮ハ稔穰をよるふおるト山田まどの風
あつりよハ短き苗と久深田よハ長きのと久忍く大
水よつりぬ多苗とを一或田苗とさつりぶ敷の事凡
一段の田一三萬と中分とと是一歩乃田よ百科なりと志
くれども地よ肥磽あり苗よ厚薄あり大抵加賀州まど

の上地ハ一科の間二尺許ありて初より畚をを用ねとさ
れ其艸を引き根とちらゆりおとハ六七度よるおと
いつり○摘田とよハ實播田の事なり深田乃人の脚
を立ぬおよハ直みねと前て苗の尺餘よるおとハ滋密
とあらと耗去てそおとら苗の長して縮とらとつら
といつり○凡田の冬は放溜と先秧とを以ておとら燻
挿畢して浸入五日して復燻復亦浸おとあり時其
水土よる厚一○凡苗代の苗と栽餘とらハそとら苗
代よ立置て一畑一村の中よ或ハ苗の損傷或ハ不足
とらそのに分與とらおとら法あり



おくく底まで日氣のさける山田里田
て斟酌とて凡一番打起り後漸くと反し土に
春草若いつたど打起と成るに土中子犁おめハ腐て
肥とある羣芳譜云犁田須犁耙三四遍青草或糞壤反○
土厚鋪於内禽爛打平方可撒種則肥而發旺
繼體紀曰帝王躬耕而勸農業后妃親蠶而勉桑序ひりし
ハ和漢共ニ帝皇乃御田あり漢ハ一藉田とて亦作
禮月令云孟春天子帥三公九卿躬耕と帝藉とて今
仙洞御所ニ御田あり小苗乃時ニ及んて京師大原八瀬
の賤の女一村くの號つるたる摺文の浴衣と表おし御
所ニ参入し苑田ニ早苗と挿蒔なり婦人を是と観るこ

こ疎得ど外丈夫を何ふことさへ免されどいり天
照大神齋庭の稲穂と耕種させのちいし故実ハ據あ
るもや本朝世紀曰六月卅日大祓今日彈正官人等令薊
宮城中田畠等俊頼命ニ御園生ニ妻の秋風そよめきて
山不とぎの志のいづあり御園生ハ宮中の畠あり凡
師加茂松尾等又諸州まで神田ニ耕人として方々よ
千臺新田大隅鹿島神社などに出おあり風俗の俚歌
と唱へ提徒の戯技あり又攝州吉備御田植乃神事又
和泉津守乃女郎どり青色の羅衣ニ玉手助し花笠と
着其内ニ法師二人鎧と穿長刀と杖つき頼兵とと方
りり出向い提刀とて打合るもいり蓋あけり皆いあし
韓の軍装とまふぬるもいり蓋あけり皆いあし
へ田舞の遠風あり又志摩國伊雜宮の田植の神事と
較ニ喉づく浦口まであり復立返は例年の事也とぞ○

高田ハ涼く耕^ス履^ス一美早^{ヒキ}とれバ有保ちづ^ク實^ノりあ
高田ハ神代紀ニ 沼田ハ涼く耕^ス履^ス一沼田ハ天武紀
阿計多と訓 沼田ハ涼く耕^ス履^ス一沼田ハ天武紀
西土福建ハ水田多く 殖土申^ス急^ク涼^ク耕^ス履^ス一草木葉と用
おど土糞とつりひ 或ハ牛骨と碎き入^ル後^ニ漉^ルハ菜蔬^ト
用 前^ニ漉^ルハ葱蒜^ト澆^ルる^カ是^レ熱^ク固^クな^ルバ二便^トと稲^田
よつりつ 反^テわき^カあ^リつ^ク貴^ク氣^トと生^ルつ^クそ
う 一^ノ水^源なく^ク多く^ク天^水と承^ル或ハ各^ノ車^ヲあ^リて^ハ入^ルる^クな
其 稲^莖軟^弱あ^リて^ハ僅^クと風^吹が倒^レと即^チと^テ時^ヲを^随て
水 車^ヲ軽^クて^ハあ^リて^ハ急^クな^ルる^ク起^ル上^ルふ^ク凡^ク上^ル田^乃
稲 を^俵に^入る^ク起^ル上^ルふ^クの^方なり^ニ按^テ西^土あ^リて^ハ稲^乃

田中^ノ第一^トと^テは^ハお^と詳^ニ南^産志^ニ志^スる^ク蓋^シ其^ノ土^ノ
壤 埴^ナ軟^弱あ^リて^ハ急^クな^ルる^ク之^レと^テ仲^纏人^ノと^テ問^フ田^中あ^リて^ハ
苗 代^ノの^秧と^テ抜^キて^ハ挿^スて^ハ其^ノ後^ニ二^番苗^代と^テ最^初極^ニ
つ ち^ニあ^リて^ハ稲^ノの^稍長^クな^リて^ハ根^株下^毎二^番早^苗と^テ
挿 つ^クる^ク此^ノ二^番苗^代は^最初^ノの^稲種^へと^テ長^ク保^居
と して^ハ初^度の^稲種^を刈^取其^ノ川^ノ株^と稗^反し^二番^稲子^種の^肥
肥 と^テ澆^ルる^ク其^ノ二^番苗^代の^還て^ハ初^度の^之の^{より}盛^長と^テ
い つ^クる^ク按^テ天^工開^物云^フ南^方平^原田^多一^歳兩^栽兩^獲者^其
田 挿^ス再^生秧^清明^時已^備早^秧撒^佈早^秧一^日無^水而^死此
秋 歷^四五^兩月^任從^烈日^曝乾^無憂^此一^異也^凡再^植稻^遇
秋 多^晴則^汲澆^與稻^相終^始此^ハ土^性つ^よく^寒晚^キゆ^急
農 家^勤苦^為春^酒之^需也

此稼といふは肥土の田地は早稲の二度植試す
 そのふる○鋤耘を耑耕夫の急務也行程の美種と播殖
 何不との碩苗と出芽たりとぬ之と鋤之と耘て其莠
 とは根より根より耕ざるを確バ親乃子と出産て後ハ巷市
 とも棄るがごとく耕ハ土養まてゆり物の根は土と高
 處て養ふとぬ又之と培壅とつゝ土と倍て根の隙と壅ふ
 となり又他より土と持來て耕ハ土持土とつゝ漢書
 取他處土為客土とあり吳氏春秋先生者為米後生
 者為糞是故其耨也長其兄而去其弟夫鋤耘されたる
 の莠草は土の精氣と奪るのなるがあらきりある

滋場く好そのを育ぐつゝ其乃常なれが耕種ハ功て緝
 養と急なきやうにして秋成の功と終る魚一太抵苗植
 付より其日許又一番草とらると根莠ふど一つを減るく
 拔を魚一又畛と浚て水かけるとよきやうに導く魚一草
 引五六層んのうら苗の時よゆぐんかく取るもやうよ
 多入らるべし苗長く繁まば其後よおさして穢草生立ざ
 候とのありぬ草と苗乃根は縮おと排にたり或ハ稲の
 根と耗ゆゑて浮根下葉とありせどして穂先は實い
 り力の乏しやうよあゝるかけ層一農書芸稲篇禮記有
 草可以糞田疇可以美土疆蓋耘除之草久則腐爛而泥土
 肥美嘉穀蕃茂矣大抵耘治水田之法須用芸不問草之

有無必偏以手排澆務令稻根之傍液液然後已荆揚厥
土塗泥農家皆用此法又有足芸為木杖如拐子兩手倚之
以用力以趾塌撥泥上草葺擁之苗根之下則泥沃而苗興
其功與芸大類亦各從其便也又云苗高七八寸則耘之
耘畢放水高之欲秀復用水浸之
苗既長茂復事薅拔以去根莠

飼

敷和訓葉草木葉と水中に漬して或は田に撒き或は
おろし灰と穀と持るとおろし又浸種と
種かし漸米とかしよ縁ふど削るをとおろし命を盡し

保登呂

淤蔭 清耕織圖於水中泥州也六月福苗旺時放去水乾將
入田内曬五七日餘日至土乾裂

時放水淺浸此月正宜加力也 糞 音耗 正字通以草木葉
木葉糞 田曰糞

蕃名ラントメステニ

按て穀菜ハ固より多ク一切の糞ハ先下糞と第一と以

て根張を養ふ受用より心と徹て糞は届るまで下糞

と熟し後乃澆糞許す地中よりの上氣と壓て存

株に腐り附か虫と生し下糞より枯る事何れされ

ば佃教よりつとを尋下地を糞と教ふ乃実言よりつと

せ流なる層し西土の糞ハ苗種て後よりふれより見えぬ

○凡福田は春の木草嫩芽新葉と養と相視てこれと

刈り三番打起の時田中へ踊入肥糞とふせり木草と

ば山かききき草葉と野かききき福ハかき



らび因て厩の敷藁粟の糶市井の溝泥糞堆道畔雨湿斜
 溝の泥壞皆一は混河もや雨益とま一日経て能醇熟
 ころ河移て肥子舎ふど小儲主人糞堆澆灰堆ふりて糞
 灰の氣おくよく敗朽てぼろろとなりころ糞實播の桶
 其の粟粟蕎麥の類もも搗種敷肥ふも用う又油滓
 米糠類も力あはば澆け潤ぬれば愈よろし○水肥
 ころあは人馬の小便斜溝の各混浴の汁米洗の糶焼耐
 粕魚腥汁類も人糶堆まらへ缸桶も貯並時より従て澆灌
 ちり熟して肥の積るはさしきるど宜し生るあはし
 きは一旦ハ養ふありても後よ其付ふと行り○沼渥田

あらば馬牛城入まて耕遍蹂躪とまらしとにき次れば
 淨泥ころころ糶の力城は魚一田此城牛おく大木を
 ぞ城牽せ通るふと行り初ハ田此肥土を引おはして魚
 糶ども人馬の足跡徧く踏とまら自然と脂潤の氣地と
 和あはして豊歳は格別糶の登とまら少かゞ次○歳首
 の雪ハ有年の瑞とまらるる歌ももあり万葉も新
 しき年の始とまらるるの志はとまらし雪のふれも
 ハ文選雪賦も盈尺則呈瑞於豊年とも又信南山全書一
 雪入地三尺三雪入地九尺故三雪ハ豊年の兆あり是ハ
 一度めの雪地も入三尺もして二度めもハ三とが九尺地

同じく性おのづからいふかきど

田廬^マ万葉集^セ○
即廬也

田居^マ書紀^ナ人名^ナ田井^ナあり田居^ハ即田舎^ナとて田舎^トハ田

未井^ト合^テ耕^ルと畧^シ解^スと見えたり○玉屑^トといつる書^ハ

以上^ノ万^葉假^名菴^ト玉^葉田^菴夫^本集^マ集^ルとて田^イい^ハち^ト

田廬^マ毛^詩中^ノ田^有廬^疆場^有氏[○]漢^志在^野曰^廬田^中屋

守^舎三^才圖^會○真^西山^言農^事之^叙云^縛

蕃^名ツ^クケ^ルワ^ツト^ヒユ^ツト

萬^葉に^志か^とり^ぬ五^百代^小田^と刈^みる^田廬^と

れ^ハ都^覺ゆ^り廬^とハ^賤の^屋ハ^早て^地は^打ふ^せら^る如^く

録^ハハ^多夫^施と^作り^此い^ハ一^ハ婀娜^國の中^とて^安

閑^天皇^屯倉^と並^み地^と一^故又^者禾^田廬^と設^て

鳥^獸と^逐い^窃盜^と防^ぐる^又山^田守^翁と^いは^は田^禾

と^看守^らる^{もの}よ^て今^の作^畫人^{なり}福^公跡^見莊^の歌

は^石上^{ある}の^早田^と秀^げと^繩と^いは^るる^る

と^いハ^いつ^り毛^詩注^古者^民受^五畝^之宅^二畝^半為^廬在^田

春^夏居^之二^畝半^為宅^在邑^秋冬^居之^宅即^今の^屋敷^{あり}

邑ハ市莊シトシ村ナリ今百姓ノ名字ト何村何門何屋敷
 トシ屋敷ハ即邑宅シト在田シ田廬シ農夫シの依場
 在方シに在シばその屋シ居宿シて耕種シ也万葉シ秋田
 刈借シ戸シと依りいほりして住ん居るといふこと
 又山シの下圃シの田居シあつて注シ又里シあれらるる田と
 こゝ又秋ハかり菴シ依りて稲シのわざとあれれと田居
 とつふ也軍防シ令シ防人シともが田シ又注シと莊舎シとあつ
 る今の莊頭シと莊屋シあつてふの縁シありき又刈種シ乃屋
 とハ刈シる稲シといふことにていへるあり山田シりる門
 田シもる小田シる賤シあつてあり

曾富騰ツ古事記○即鷹備也按シ古事記久延シ毘シ古者於シ今者
 神也是シより此神像シと田シの中シに在シるが屋シがておどろ
 加シとよりいふや曾孫シ好シ又山シ田シ中シに在シる今
 はなぐめまを承シる形シよりおほまはる又保シ中國湯
 川寺シにて僧シと曾孫シが山シ田シ中シに在シる又保シ中國湯
 通シ澄シ又尺シえり又貞シ澄シが添シ水シと云シる経シ記シ
 引板シ多シとといひて比シ鹿シ畏シ下學シ集案シ山シ子の字シと云シる
 里シかシあシるの如シ一シ説シ鹿シ奔シる免シ鼓シ同上シ亦シ鹿
 鳴シ子シ俗シ子シ麻シおどシ日シ次シ紀シ凡シ作シ橐シ人シ驚シ走シ鳥シ獸シ者シ謂シ之
 水シ流シ使シ其シ有シ傲シ敵シ者シ謂シ之シ賀シ吳シ々シ此シ等シ都シ稱シ鳥シ威シ按シ今
 單シ威シとシありと云シ賀シ吳シ々シハ物シと畏シ也シ志シひシの考シ子
 里シ俗シ賀シ吳シ毛シ布シ



山蔭々

福々々

麻垣や

三々々

うん

おまち

の

月々

いでよ

す



鷹備 天工開物凡穀種生秧之後妨雀鳥
聚食也立標飄揚鷹備則雀可毆矣
州人 宋子 虛詩

蕃名モレイキ トインスポート
崇神紀以夢辭奏曰組繩四方逐食粟雀是鳥逐の去との
尺え一始ふる次むりハ鹿豕の類稼苗と傷ハ害の患
多一春秋ニ田獵となりて禽獸と逐ハ除くあり是を
麻特ともいふなり万葉ニ志々田也といふは山田ニハ
那猪ふとの害をと防ぐ也又々の鳴子ハいふくハの鈴
奏ニ出るとも名々ぬ園槐鈔曰諸社比鈴奏懸鈴曳之と
あり西土ニとも鈴索 五代高 祖紀 鈴架 唐昭宗紀註 鼓架懸鈴 ともいふ
の鈴奏と相似り冠辭考曰引板ハ名々何屋つり火と

といふとゆゑに世にありて人ありてんらる田所あ
り引板と水は何屋のりとも名々の力とてあやふきと
しるがごとくあまの心まて弾とらふものともいふ又宛
委餘篇云以板激水以鼓之田間防禽獸之器也之と水牌
と云ふものともいふ ○秘藏抄の歌小目括して粟穂ま
まふらけりハ鳴竿のちてまらけらけらハ鳴竿
ハ竹竿路ニ鳴子と名てそれと鳴して序山里の地り聲
と推ふがにちぎとれドと卵童ニ逐らるまらまら我者に
逐らぬハ鳴子と名てそれと鳴して序山里の地り聲
は志ぬハ鳴とてそれと名てそれと鳴して序山里の地り聲

哉をぬきちりきれと漢志めとると注しるる陸銓詩清
 明日薄晝陰々籬外新秧短似鍼縛草象人田畔立借他風
 カ、逐飛禽是々の藁人のおどしり又明日よりハ焼志め
 てじ小山田乃我日坊稻と志めとをち焼志め馬ふ
 どの尾髪を剃てちさこち焼と焼て田またつふや其臭
 と嗅て麻の田と焼志めとれと焼志めとつと河也
 日志めとハ標繩より出て禁限の意共ハ麻畏とあり
 ○冠禱考ハ麻火屋ハ深山里にて猿席と遊ハキ雁菴よ
 残入居て引板とつらし考とたて具あやううほこと
 焼き草志めとく申うらうらよ人あつふと公記てりとの

の田よま附ぬきり是も焼禁よて獣ハ火氣と臭ハ熟踏
 とも逃てぬぬ志め○凡いまご獲がふ稲田ハ鷺雁雀
 鳥鳩雉とつひまねくハけうざれとも己よ刈て晒
 志めとる沼田志めと雁鷺刺促志めと時冬扱十斛の稲子
 とは食ひ禿し刺も稲莖ハ煮く沼中ハ踏志め一畝二畝
 の田町志めハ僅一畝の曾み牛舎のやうに踏志めとの
 たりかハ水坊志めたりてを現人さく習うぬゆと麻カ
 ちどの高木人志めとのみあつたつとつ詩ハ難奈飢鴨
 攫錦鱗藁人藁笠立池邊慣看来冠尚如故豈憶他時假
 假真志めと山谷の傍近き志めは野猪ハ稲稈地抱さく

らひ麻ハ種とよむる食ハ猪麻の群里ハ一跡ふと大
 本城引通せしりごとく因く百姓救ハ金鼓と鳴りしと
 驅オウ通宵ヨモスガフ寝ざるをりさきとて同もさうぬとつふ
 町の碩ヒロク田タぢぢは五人十人の力あて追ツづく後ハ雁カシ鷺
 と金鼓の音城守シ引とくツと叫オケどと鳴き遊ユるを教シ屋
 埒マり立く首ウと突ツ貫スく福フ屋ヤぬ入くごとくは頃キ吹フぬ
 其田地の跡とてんふさふぐ人馬の跡フミ踏ミやより阿
 さは一天武紀童コ誼ニ我ガあまの保田ホは阿アぎりまじとい
 あも田タは災サらりシ也ヤ是シ農家の大厄オ方ハたれがレ成
 ぬ由ユなりぬ守シ舎ヤと立てテ琮コ獲ハと施セ一切キくク驅ク捕ツぢチよ

豊後風土記頸峯下有水田此田子鹿恒喫之
 田主造柵伺待鹿来舉已頸容柵間田王捕獲
 將斬其頸鹿請云云田主大懐怪異故免由時已来此田苗
 子不被鹿喫今獲其實因曰頸田兼為峯名柵ハ即鹿垣也
 田タ儂ニ紀キ天テン智チ 田タ樂ラク朝チヨウ野ノ 田タ踊ヨウ

按田樂はいふへの田舞にて中ナカ昔カゼより一種の舞曲
 よとてはやされ今ハ僅ヒも其部民の家ウに存ゾて田舎イナは
 ハ御田植ミタウキの土曲ツマぢぢの申ウは片ハ場バ乃ノ趣ソどドぬヌえエるル蓋
 其初ハ古語拾遺コゴは以テ竹葉チクエフ飲ク憇シヤウ木キ葉エフと為シ手草テカサと何ニと
 や其ノ起キるルづツ手草テカサハ竹木チクキの本ホとト合アて舞マらルる
 かのノ假カ垂シ手テとて舞マらルる是レ今田イマタ間の農夫ノウ等トが田
 踊ヨウぢぢチ頼タりて飲ク憇シヤウハ桶ツケと置オきキ木桶キバケと打ウたタるル

其底と敲き拍子越り舞とまや一神の代と誓槽踊と
 とよかせし遠風よて田圃乃事まきば太鼓つゞこの代
 子桶の底あそき歌の曲と和る純朴ある俗ある
 拍子と後ハ銅鉦子といつふ器と假續紀 聖武天
 皇天平十四年正月天皇御大安殿宴羣臣酒酣奏五節田
 儻又三代實錄貞觀元年多治氏奏田舞や式の事ハ貞觀
 大嘗儀式又田舞ハ内舍人六人内豎六人大歌生二人彈
 琴一人笛工一人御琴一面とあり琴笛ハ神は代の樂器
 あり琴笛相和せしめしはと美話登尔布曳阿波世あ
 ざあるハ宣命の恒例ありき大嘗ハ年穀の御祭まれば

田舞の式もゆりよしてそ人員を今の田樂と合つるよき
 ありる今又田樂由来の記とを引合て考ふるよ日
 吉雜記ハ田樂の事神代地神始ハ百萬神五穀の精氣を
 田地より下して有情の壽命と續くと計いよし時即樂と
 變り春苗栽植の時舞樂と云穀と祭りふりある故に
 田樂と申社稷神の起也とも又猿樂濫觴ハ猿樂田樂ハ
 猿女君の傳所ハ神樂二つに分きて五穀の豊熟と祈り
 しよある今の獅子舞を其遠風ありとしくつゞきや
 らはらうとどりのハ本笛傳也とつゞき榮花物語曰加
 茂の祭りとどろ 治安三年五月ハ成ぬ大宮土御門殿 上東
 門院

おまゝませば殿の^御御あまわぎを^御御覽せさせ
 んとおぼしめて此殿の御まやの戸くさの田ハ殿の
 きざわつりせうおれを^御御覽せしめける此あろくべ
 くりつれづれしまの司めしめてこの田うゑん日ハ候の
 有はまあぐはくろひ^御御覽せしめける事もあるて物せこがま
 ういりあも有のまゝよてこの南のくこのむしまの御
 門よりあゆこつぐりせしめ^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめ
 わし^御御覽せしめけるこのはしめ^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめ
 御覽せしめける^御御覽せしめける^御御覽せしめける^御御覽せしめける
 なき女ども五六十人ぐらゐりに^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめ

ろくきせく白き笠を^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめ
 て紅^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめ
 つおきまいとあや^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめ
 ひも^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめ
 くらうい^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめ
 してま^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめ
 いてあや^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめ
 つお^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめ
 とい^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめ
 田^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめけるはしめ^御御覽せしめ

とぞあししゆく中我まゝにのこけくざりあそび奏ナク
 るははぢむのこどろおろけしこそあれ雨をこ
 ろりて田子のつゆのこききばとけりいほのちどよ
 りまわりまらきん五人くすきくすなまらちてうら
 るどもさくおろしし御覽どられらば田人どめのう
 らふまじとまぢりめせばたゞこれよこひとそぬし
 る田と夫が子とせのこまなくともせん又まこめせど
 うるよりうげとまぢりまぢり大空とくまぢりまぢり
 まくまのこひとまぢりまぢりまぢりまぢりまぢり
 ばまぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢりまぢり

伊勢貞丈曰 吾の文を案らうまはの仰みハ
 田とう忍々せよとありて田樂せよとせよと
 仰ざりしは田子のあるまじりて田樂の者のあ
 りて田子ハ必なりて田樂ハたゞるりありの
 ちれはたゞありしは田樂の者の中にもうの歌とを
 流るるうといひて舞あり者あり者ありはたは田樂とハ名
 付るるありりの田子ハ田樂ハ田子の心倦之形の疲
 るとといひしは田樂ありて田子ハたゞるりありの
 田の神を祭る神樂ありとて田樂ハたゞるりありの
 りの法師のする田樂と祈りの神社の祭礼ハ用るる
 らるる古事談曰 堀河帝永長元年大田樂事或人記
 曰七月十二日参内祈年穀奉幣定也今日殿上人田樂事
 卅餘人云々是祈年穀の日とて田樂ありなり朝野
 羣載ニ載以匡房洛陽田樂記曰永長元年之夏洛陽大有

田樂之事不知其所起初自閭里及公門高足一足腰鼓振
 鼓銅鼓子編木殖女養女之類日夜無絕中或裸形腰卷紅
 衣或放髻頂戴田笠今按田笠はとや殖女の具にて中
小田笠と云女戴者ハハ引くは色絹と類は襦袢等
より小田笠と戴るりやの佐少女が悦かがりて其
上より菅小笠亦着百練抄曰永長元年七月十二日殿上
くは概ありあり侍臣有田樂事續世継物語曰永長元年お田樂とて都
はあり今昔物語曰田樂を以て思ふ田鼓と腰は結付
て袂より脇に丸出してた右の手に桴と持るり或ハ笛
と吹き高拍子と突き編木と突杖と差て振くの田樂と
二つ拍三つ拍は儲てお唄を唄つまつつ狂あも詠りあ

一ハハ把の無齒物にて農具東鑑曰頼朝卿於大姫公御
方山際前栽被殖田美女等殖之皆唱歌又壯士中被召出
有能藝之輩為事笛鼓曲是田樂の事又あり次といへど
も田植の女と用て唱歌の俗あり太平記は據る元弘二年
同書寶治元年九月十六日相摸國毛利莊山中有怪異等
每夜田樂雜之由土民等言上云々按是北條氏が積徳貫
洛中貴賤田樂と弄ぶ相摸入道新羅本座の田樂と呼下
して月夜郎等と弄ぶと他あり其費錢千万と云敷と志
らび又貞和五年洛中田樂と概が法は尊氏是
と無と類ありされば万人足と空ありて相夕

是が爲に孺費によか此時の田楽ハ既ハ一種の舞曲と
 らぬ事々ぞ了けふ
 変や一あぶ一田楽由来ハ一鶴ハ奉幣祝言と勤編本
 と摺りや一と一二鶴ハ花笠と被り足下と一き横
 笛と吹三鶴ハ小鼓と打下座五人ハ羯鼓と打五人ハ編
 木と摺り都合指三人業の指費と佩狩衣と着綾茵笠と
 被り革咄とくいつとと猿樂の樂器と同様ありと見
 えたり又豆腐と串さし一とと田楽とら一ハ田楽の時
 一本竿と立て其竿ハ法沙のまがり上り一とと一ハ
 もるより名あり一と何り常陸國誌等ハ據ハ水戸より北
 久慈郡金沙山ハ田楽何り俗ハ夷と稱と法師と一ハ

金沙山権現祭禮七十三年丑の年毎ハ大田楽有之奇
 觀あり一いつり是田楽の本原あり一又武藏豊島
 子神社毎歳七月十三日祭礼ハ生土の者共舞踊とあり
 之と典藥踏と云々中ハ踊子ハ人皆同ハ装束被物
 二面とかけ頭ハ華と挿大つとつと一ハ縹糸等と
 持て拜殿とて奏踊舞之ハ笛太鼓のそと一とと右
 風あり一と名迹志ハ著やり或謂ハ亦田樂ありと俗ハ
 此と典藥と云々一或ハ又田役と云々一ハ名ハや按ハ
 同村ハ石神井川あり田場の用あり蓋石神井ハ作神
 又石像の田神と云々一ハ安置して遂ハ川の名とせ
 らん又愛ハ王子稲荷社何り除却毎ハ山上ハ狐火と懸
 由あり一と白石俳優考ハ引匡房卿田樂記曰其高足一足
 及殖女養女の類とら一あり殖女ハ田と殖ハ女の事ハ
 て養女ハ蚕と虫ハの女の事とら一いつり此考よく尚



まのり今 高倉帝嚴島御幸記を讀み治承四年三月廿三日
日下使前のこゆれ泊り居せり所仍りより舟の
のせりも新くくごのつゝ上達部殿上人ごまの
番下ともつくり並つくり遊ばし一輪て舟舟居り
をりしハ舟與りてどろちりせり所東のつゝに
祭る屋せ仍りく入道内侍ごまをてまのれさぬくの
ひくこれごも錦とまらひ道花とつけりハ人阿のま
りてごんかくご女此あそびごもご只あごんき
よ河ふ登ふに海のみより目おごりやあごん
とおふゆ田樂をてふくばやあり去の田樂ごご

のせりまげ女のみせり伎舞よてそ糺さぬハ男の物作
せりも何りまや女此何ごびごもごごハ記ごり
おごんせりハ土佐某の画ごふるごその女ハ田笠に
花さして表を披りるハうは衣のさぬよて屋へ回る
ごしきうれバいごの田舞ごめりハ女此ごのせ
りわごよやご南のいご沖繩ごごご遺りごり
いごりは女ハごりて新法曲子のやうにハ愛をてご
やごごごごごごごごごごごごごごごごごごご
も佛も迷ひて三善氏ごごの卵ハごる所ある人もご
よく法師ごごごごごごごごごごごごごごごごご

も出来らん思ふの細事よつけてさへ書き書おみれは
 さうぬむうけさうはくもいさも有りては
 懐と感ぬまうてやさよりの後の代も有りては
 々のありさほまのびもうらみもさつづもさうも
 らんかし凡ハ田うくる業ハ女ハ限らざれども其殖
 るまひむうより女と用おしあどに佐少女ふども
 う女の事よしの物せり蚕の事ハ終文ありま思ふて
 田樂ハむうの田舞の遺俗よて々の田踊ハ又田樂の
 儀智ふるはさるや按ハ周禮籥章云凡國祈年于田
 祖則吹豳雅擊土鼓以樂田畯○後漢志云后稷之祀舞者

象教田是西地田よ樂める始あるべし又范至能臘月村
 田樂府の叙河云余歸石湖往來田家得歲暮十事採其
 語各賦一詩以識土風跡村田樂府と事文類聚に載り

小野岡
氏藏書

成形圖說卷之四終

